

公衆衛生医師は私の「天職」



大阪市健康局健康推進部
健康づくり課 医長
植田 英也

平成19年大阪市立大学(現・大阪公立大学)医学部卒業。初期臨床研修終了後、同大学血液腫瘍制御学(血液内科)に入局し、大阪市立総合医療センターで臨床に従事。28年大阪市入職。大阪市保健所にて主に感染症対策に従事した後、令和5年より現職。血液専門医。社会医学系専門医。

「大阪が世界一の健康都市になる」。それが私の夢です。41歳、厄年のいい年をしたおっさんが、本気で夢を語り夢のために生涯をささげられる。それが公衆衛生医師の魅力であり、私をとりこにする理由です。この職業に出合えたこと、この職業の魅力を日々更新し続けられる環境を与えてくださる職場の上司や同僚、そして愛する家族に感謝し、思いを大いに語ります。

大阪市民として

生まれ育った神戸から、大学進学をきっかけに大阪に転居しました。大阪市立の病院で臨床医を経験し、34歳で大阪市に入職。今では大阪に住んでいる期間の方が長くなりました。大学時代は大阪の喧騒が苦手でしたが、今は大阪のまちが大好きです。入職する自治体として大阪市を選んだのは「自分の住んでいるまちがよくあってほしい。自分が住むまちの人々の役に立ちたい」という思いからでした。「大阪の医療や保健はもちろん、安全、教育、経済、そ

して住民としての誇りなど、生活のすべてがよくあってほしい」といつも願っています。「子どもたちを安心して育てられるまち、老後も安心して過ごせるまちであってほしい」。そんなことを日々考えながら、市役所に通勤しています。

Health in all policies(すべての政策において健康を考慮すること)という言葉がありますが、私は毎朝、市役所の庁舎を見上げながら「この建物の中の人たちが私たち市民の暮らしを守ってくれているんだな」と、感謝の気持ちと連帯意識を感じながら入館ゲートをくぐるのです。

公衆衛生とは 幸せを追求すること

「公衆衛生とはみんなの幸せを願う気持ちである」と、あるご高名な先生が話をされていて、本当にその通りだと感じました。公衆衛生の素晴らしいところは、一つには「大義がある」「究極的な目標は揺るがない」ことだと思っています。どんなにつらく苦しくても、もし仮に理不尽なことや自分のプライドを傷つけられるようなことがあったとしても「すべては大阪市民が健康であるためだ」と考えると、自然とすべてがささいなことのように感じるのです。この心境に至ることができたのは、とても幸運なことだと思います。イェール大学の組織心理学者、エイミー・レズネスキー教授によると、仕事の捉え方はジョブ(労働)物質的な利益を稼ぐための手段)、キャリア(自分を高める、成

功するための方法)、コーリング(天職)人生から分かつことのできないもの、仕事を行うことで得られる満足が報酬)の3つに類型化されるそうです。「公衆衛生医師は私の天職」。一点の曇りもなく、素直にそう思えるのです。

もう一つ、公衆衛生医師の素晴らしいところは、多様性が許される職業であることだと思っています。バツグンラウンドがまったく異なる医師たちが、それぞれの能力を持ち寄り、それぞれのライフステージや家庭の事情に応じて、できる範囲でできる方法で精いっぱい組織に貢献することが比較的許容される環境、そんな懐の深さも公衆衛生の魅力の一つだと思っています。他人の幸せのために尽力できることは、まず自分や仲間の幸せのために心を砕けるひとであるべきだし、実際に私が尊敬する公衆衛生医師は皆、それが実践できていると感じます。

公衆衛生医師人生を通して 取り組むべき大きな課題

最近、私の公衆衛生医師人生に大きく影響を与えた出来事が2つあります。1つ目は、「国立保健医療科学院専門課程I保健福祉行政管理分野分割前期(基礎)」、いわゆる分割前期研修を受けたことです。今年度の4月から7月まで、忙しい職場から長期の派遣を許していただきました。送り出してくださった上司や同僚、職場の皆さまには本当に感謝しています。

この研修は、私の公衆衛生医師としての視野を大きく広げてくれました。それまでの私は、日本中の多くの公衆衛生医師がそうであったように、COVID-19対応に生活のすべてをささげていました。3年以上にわたるこの経験で得たものは大変多く、公衆衛生医師のやりがい、喜び、悲しみ、難しさ、さまざまな感情をCOVID-19対応のフィルターを通して味わい、「自分はこの職業で生きていきたい」という思いが確かなものになりました。しかし、この科学院の研修はまた別の視点を私に与えてくれました。高齢化や

社会保障など日本全体の動向を学ぶことで「日本の中の大阪はどうなっているか」「地域の課題をいかに地域で解決するか」を意識するようになりました。この考え方は、現在取り組んでいる健康づくりの分野にもとても役立っています。高齢化の進展によって生じるさまざまな健康問題は、これから日本が取り組まなければならない最も大きな公衆衛生上の課題の一つであるといえると思います。COVID-19パンデミックは突如発生した公衆衛生上の緊急事態でしたが、高齢化で日本が直面する課題の大きさを考えると、これは20年かけて確実にやってくる公衆衛生上の緊急事態なのではないか、と私は科学院の講義を受けて戦慄しました。ですがそれと同時に、国・地方自治体・研究機関などさまざまな公衆衛生に関わる人々が、この国難を乗り越えるために必死になら

て考え、実践していることも学びました。私も地方自治体の職員として、大阪からこの課題に取り組めることを誇りに思っています。

なお、今回このページの執筆機会を私に与えてくれたのは、研修で出会った大切な友人です。この場を借

りて、お礼を申し上げたいと思います。また、国立保健医療科学院職員の皆さまや同期の仲間たちとは、これからも一生のお付き合いを続けさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

2つ目は、地域保健総合推進事業(全国保健所長会協力事業)「公衆衛生医師の確保と育成に関する調査および実践事業」班での活動です。

お声掛けくださった群馬県の武智浩之先生と香川県の横山勝教先生、そして活動を許してくださいっている上司の先生方には大変感謝しています。イベントの企画や運営、広報活動や教育資料の作成、班員の先生方との交流を通して、数多くの成長の機会を頂いています。この活動で得た知識・経験・つながりは私の財産です。そして、この活動による最大の収穫は「自分の姿を俯瞰できたこと」です。メタ思考(俯瞰して考える)という言葉があります。この事業班の主たる目的は公衆衛生医師として働くことの面白さややりがいを伝え、新たな人材を確保し、確保した人材が公衆衛生医師として成長し続けることをサポートすることです。そのためには、自分の公衆衛生

夢を果たすために

医師としての在り方を客観的に見つめ直す必要があります。自分はどうありたいのか、俯瞰的に考えることで、公衆衛生医師という職業がさらに好きになれるのです。横山先生は「公衆衛生医師をみんながなりた職業の一つにしたい」といつも仰っています。その志に共鳴しています。

私の夢は「大阪が世界一の健康都市になること」です。子どもじみている、果てしない夢ですが、それくらいがちょうどいいと思っています。私が生きている間には果たされないかもしれませんが、一生をかけて取り組んでいきたいと思っています。自分は大した人間ではない、だからこそチームで闘うのです。私の周りには、職種を問わず優れた上司や同僚がたくさんいます。とても恵まれています。時には叱られ、時には大笑いして、大切に育てていただいています。ご縁とご恩で、私は今ここに立っています。点と点が線でつながり、いつか太い道ができることを祈りつつ、感謝の気持ちを忘れず、地に足を着けて一歩ずつ着実に歩んでいきたいと思っています。